

# 令和3年度事業報告

## 1 経常的な法人運営

### (1) 理事会・評議員会の開催

令和3年6月1日 第35回理事会を開催した。

(議題：令和2年度事業報告・収支決算、理事の職務権限規程の制定、理事長の職務の代行、常務理事の業務分担、監事監査指針の制定、会計処理規則の改正、賛助会員に関する規則の改正、第2回『学術の動向』編集委員会（報告）、第22回評議員会の招集について)

令和3年6月22日 第22回評議員会を開催した。

(議題：令和2年度事業報告・収支決算、理事の職務権限規程の制定、理事長の職務の代行、常務理事の業務分担、監事監査指針の制定、会計処理規則の改正、賛助会員に関する規則の改正、第2回『学術の動向』編集委員会（報告）、評議員及び理事の再任について)

令和3年12月1日 第36回理事会を開催した

(議題：第23回評議員会の招集について)

令和4年3月22日 第37回理事会を開催した

(議題：令和4年度事業計画・収支予算、「『学術の動向』の普及及び財団支援についての要請書」、第4回・第5回『学術の動向』編集委員会について（報告）)

令和4年3月22日 第23回評議員会を開催した。

(議題：令和4年度事業計画・収支予算、「『学術の動向』の普及及び財団支援についての要請書」、第4回・第5回『学術の動向』編集委員会について（報告）)

### (2) 学術情報の収集調査及び情報発信・普及啓発（公益目的事業1）

#### ① 『学術の動向』の発行

日本学術会議の編集協力を得て、総合学術情報誌『学術の動向』を刊行した。同誌には、国内外の学術の動向を特集するほか、日本学術会議の活動状況を紹介し、

広く、大学、研究機関、学協会、一般に周知した。

## ② 『学術会議叢書』の発行

学術及びその成果を広く一般に普及するため、日本学術会議の部や委員会・分科会において審議された内容や、日本学術会議が主催した公開講演会の記録を基に関連資料及び解説を加えて編集した学術会議叢書を刊行しており、令和3年度は次の1冊を刊行した。

学術会議叢書 29 『人文社会科学とジェンダー』

学術会議叢書 29 は、(公財) 一ツ橋総合財団からの助成を受けて、全国約1,500ヶ所の国公立図書館・大学等に寄贈するとともに、賛助会員たる学術団体等に無償配布した。

## (3) 学術連携推進事業（公益目的事業2）

### ① 科学者連携事業

日本学術会議主催の講演会、シンポジウム等の事業について、学術普及・啓発事業の一環として協力した。

### ② 学協会に関する実態調査及び調査結果の情報発信

— 「データベース『学会名鑑』Web版」

我が国学協会に関する包括的なデータベースである「学会名鑑 Web版」について、一層の利・活用を図るため、(国研) 科学技術振興機構 (JST) 及び日本学術会議と連携・協力し、収録学協会の拡大及び収録データ事項の充実を行った。

### ③ 国際学術交流事業の実施

同事業の今後の在り方について、当財団の事業運営及び財政の改革に関連して、検討を続けた。

### ④ 学術調査研究事業の実施

同事業の今後の在り方について、当財団の事業運営及び財政の改革に関連して、検討を続けた。

#### (4) 学術関係団体事務支援事業の実施（その他事業）

日本学術会議同友会、日本生命科学アカデミー、日本農学アカデミー、硬組織再生生物学会等、学術関係団体からの要請を受けて、各団体活動に係る事務の支援を行った。

## 2 事業運営及び法人財政の改革

### (1) 「学術情報の収集調査及び情報発信・普及啓発」（公益目的事業1）の改革

—「科学と社会」に関する発信の一層の強化

#### ① 『学術の動向——科学と社会をつなぐ』の改革

同誌については、科学と社会を双方向につなぐ学術誌への改革を基本方針として引き続き誌面の刷新を続けた。

また、同誌については、令和4年3月22日の理事会及び評議員会において、総合的、俯瞰的な学術発信を強めるための内容刷新と質の向上を目指して季刊化することが承認されており、これをうけて、具体的な検討を令和4年度から開始するが、これに先立ち、令和3年度においても、準備的な検討作業を進めた。

#### ② 「科学と社会」に関する発信—「科学と社会研究会」

「科学と社会研究会」の議論を引き続き推進した。

同研究会の重要テーマである「第三カテゴリーの研究」（既存の研究支援の枠から外れた「純粋な好奇心」に基づく研究）に関しては、同研究の「種」を発掘する調査研究を引き続き進めた。

#### ③ 第12回グローバルヤングアカデミー年次総会日本開催に向けた取組

原田弘二基金による国際活動としては、第12回グローバルヤングアカデミー年次総会日本開催に対して同基金として共催することとしており、令和3年度は同年次総会に向けた準備作業に集中的に取り組んだ。

\* 第12回グローバルヤングアカデミー年次総会は日本学術会議若手アカデミーが主催するが、同時に、原田弘二基金としてこれまで進めてきたシチズンサイエンスに関する公開シンポジウム等の活動成果を各国若手研究者と共有しさらに発展・深化させる機会でもある。このため、同基金として同年次総会を共催することとし、所要の資金援助を行うこととしている。

\* 第12回グローバルヤングアカデミー年次総会日本開催に関しては、新型コロナウイルス感染が世界的に拡大する状況の下で、特に、その開催時期を巡る各国間調整は紆余曲折を経たが、最終的に、令和4年6月12日から17日に日本（九州大学）で開催することとされた。

## （2）法人財政の改革

上記の事業展開を支える法人財政の改革として、以下の取り組みを推進した。

### ① 賛助会員拡大策の推進

当財団事業の今後の展開を支援するよう、引き続き日本学術会議会員・連携会員、学協会等関係方面に対し賛助会員加入を求めた。

特に、令和3年度は、当財団の自立財源の柱である賛助会費収益の抜本的な拡大を目指して、以下のとおり重点的な取り組みを進めた。

- i 当財団NEWSLETTER 令和4年1月号の吉川弘之会長「年頭挨拶」において、日本のアカデミーである日本学術会議が社会に向けて発信する上で『学術の動向』が不可欠の意義を持っていること及び同誌刊行事業の持続的な運営のために当財団財政基盤の抜本的な強化が必要であることを訴えた。
- ii 令和4年3月22日開催の当財団理事会及び評議員会において日本学術会議会長及び同幹事会メンバーに宛てた「『学術の動向』の普及および財団支援についての要請書」を議決した。議決後、当財団から同要請書をもって、日本学術会議会長及び同幹事会メンバーに対して、同会員・連携会員が『学術の動向』の普及と当財団の支援に従前を超える協力成果を挙げるように働きかけることを求めた。

### ② 『学術の動向』季刊化に関する準備的な検討

『学術の動向』の季刊化は、上記（1）①のとおり同誌内容の刷新と質の向上を通じて読者層の拡大を図るものであるが、同時に、同誌刊行事業の収支改善を目指すものである。

このため、同誌季刊化への移行とその事業収支改善効果に関して令和4年度から具体的に検討することとしており、令和3年度においては、そのための準備的な検討作業を進めた。